

52 外科の守護聖人サン・コームと

リュザルシュ村の教会

大村 敏郎

一九九〇年十一月、アンブロアズ・パレの没後四百年祭に参加のためフランスを訪れた際に、パリから北へ三十キロの所にあるリュザルシュ村を尋ねることができた。そこにはサン・コーム (St. Come) 教会があるのである。

十三世紀に発足したパリの外科医組合の守護聖人になったサン・コームは三世紀に自らも医療活動を行っていた。ローマ帝国のキリスト教弾圧の犠牲になって処刑されたのだが、生前のすぐれた医療が死後は医療信仰と結びついて、十九世紀の始めまで威力を発揮していた。

サン・コームの聖遺物の一部が小アジアから五世紀にローマへ、さらに十二世紀にリュザルシュへ、十三世紀にパリへもたらされ、それぞれ教会が作られた。リュザルシュ

の場合はパリよりも早く、フランスにおける最初のサン・コーム教会ということになる。

三世紀の話だがサン・コームには、これも聖人になったサン・ダミアンという弟がいた。自分が医学を弟が薬学を担当していたが、この二人は双子の兄弟であったという説もある。何分古い時代なので生年は不明であるが、処刑された日が二八七年九月二十七日であったことから、九月二十七日が二人の聖人の祝日としてキリスト教暦に残っている。日本ではどういふわけか九月二十六日に登録されている。

十五世紀になって、フランス王妃がリュザルシュとパリの同名の教会の交流をはかって、パリのサン・コーム教会に本拠をおく外科医組合から毎年サン・コームの祝日九月二十七日ともう一日十月二十八日に外科医を派遣させ、リュザルシュの貧しい人々の無料診療に当らせた。

生前のサン・コームたちが医療を一切無償で行っていたことに由来する。外科医組合はパリでも月に一回無料診療をやっていたのであった。

この伝統にのっとって、十九世紀の始めに聴診器を作ったラエネッタもリュザルシュへ足を運んだといわれている。

る。以上のことを知りながら、今までリュザルシュを訪れる機会がもてなかった。

リュザルシュは農作物の集散地として栄え、宿屋が軒を並べにぎやかな市がたったというが、今は昼食をとろうにもレストランがないほどのどかな村である。しかし十一世紀に創立された教会はその後増築され、十六世紀の姿のまままで現存していた。高い塔は一五三七年の作で、この年アンプロアズ・パレは処女出版のきっかけになるイタリア遠征に出掛けるのであった。

教会の左奥に聖遺物をいれた函と、サン・コームとサン・ダミアンの姿を画いた旗と、入口にかかげられた二人の聖人の医療を行っている絵画の他に、医療の歴史を辿る資料はないようであった。近隣の教カ所を巡回するために、司祭館には誰もいなかった。

あとで解説で知ったことだが入口のアーケードのレリーフに、二人の出産と産湯を示すものがある、この部分が作られたルネサンス時代には二人の聖人は双生児として考えられていたことを知ることが出来た。

外科医組合の活動の一つであったリュザルシュの医

療の場所を確かめることが出来た他に、この地域を基盤に文豪バンジャマン・コンスタンが議員になったこと、サロンの花形スタール夫人が彼の所へ出入りしていたこと、ラエネックはスタール夫人の主治医だったこと、スタール夫人の両親ネッケル夫妻がパリのネッケル病院の創立者だったことなど、小さな旅が様々な文化史をたぐり寄せる機会になった。

(慶應義塾大学医学史学研究室)